

「今」を生きる

城南中学校 三年 高波 ひかり

二〇一七年の夏の夜を、今でも鮮明に覚えています。私は家族そろってご飯を食べていました。すると、とうもろこしにかぶりついていた小学校二年生の私に母が言いました。

「すーちゃんがお亡くなりになった。」

すーちゃんというのは当時の私にとつて、初めての自分よりも小さいところでした。私は呆然として、とうもろこしが涙でしょっぱくなるほどたくさん泣きました。すーちゃんは生まれたときから心臓に病気を患っており、会うといつも鼻に酸素チューブを入れていたり、手術を何度かしてきたため、お腹には手術の跡があったりしました。すーちゃんは入院を繰り返していたので、保育園や幼稚園には通っていませんでした。そのため、同い年の子よりも、友達が少なかったと思います。毎日学校へ通い、勉強して、友達と話して、放課後に友達と遊んだり、習い事へ通ったりするという私たち学生には当たり前な生活を、すーちゃんは過ごせずに亡くなってしまいました。すーちゃんはたくさんの大きな機械に囲まれていました。それでも私は、「今までだって乗り越えてきたし大丈夫だろう。」と信じていました。しかし、「死」というのは意外と身近にあるものだったのです。

ところで、学校などではお互いにふざけ合って、軽はずみに、「死ね」と言っているのを耳にすることがあります。お互いにふざけ合っていたとしても、言われた人は多少なりとも傷ついていると思います。私も周りで「死ね」という言葉を聞くと、とても嫌な気持ちになります。おそらく、私だけではなく、誰でもそのような気持ちになるでしょう。しかし、私には頑張って生きようとしていたけれど、意志なく亡くなってしまった大切な人「すーちゃん」がいたため、誰よりもそういった人を傷つけるような言葉には敏感で抵抗があるのです。そもそも、言ってしまった人はその友達に、本当に死んでほしいと思っているのでしょうか。私には、ただ頭にきたからなどといった一時的な感情だけで言ってしまったように感じられます。私は思っていないことを口に出してしまい、あとで罪悪感や後悔を感じたことがあります。それはとても辛いことだと知っています。言ってしまった人も、本人は自覚がないかもしれませんが、実は傷ついていると私は考えます。それは、暴力や、いじめも一緒だと思います。相手を傷つける言葉や行為は、誰の得にもなっていません。また、それらの言動によって深く傷つき、不登校や自殺に追い込まれてしまう人も少なくないそうです。そのため、私は軽い気持ちやその場の勢いで、人権や命に関わるような相手はもちろん本人までも傷つけてしまう言動をしてほしくないのです。

私の大切な人「すーちゃん」は、病氣と闘いながらももうすぐ四歳というところまで

頑張っ生きてきました。目標に向かって勉強し、部活動では仲間と力を合わせて一生懸命頑張ったり、笑ったり、時には涙を流したり、特別な景色を見たり…そんな「今」を私は全力で過ごしています。私は学校が楽しくて大好きです。すーちゃんにも、そんな生活を過ごしてほしいかったです。私はすーちゃんの分まで、「今」を人一倍、大切にして、楽しむようにしています。そんな私の姿を天国からすーちゃんに見てもらえていることを願っています。

みなさんの中に、もし「今」を大切に過ごせていないなと感じている人がいたら、自分たちの当たり前の生活を過ごしたくても過ごせなかった人もいるのだと思います。してほしいです。自分がいつ、どこで死んでしまうかなんて誰にもわかりません。わからないなら、なおさら「今」を大切にして、亡くなってしまった人の分も全力で私と一緒に楽しんでみませんか。